開催地名：青森県藤崎町	
開催日時	令和 5 年 1 月 15 日（日）　10：00　～　11：30
開催場所	藤崎町文化センター
語り部	野田　幸代　婦防みやぎの朗読会　(宮城県仙台市)
参加者	町内会・自主防災組織・町消防団　132 名
開催経緯	本町では、平成 16 年の台風 21 号以来大災害に見舞われていないため、住民の防災意識が薄れてきている懸念がある。また、未だ経験したことのない大災害についてのイメージが沸きにくいため、被災時の対応について、住民の間に浸透しているか甚だ疑問である。今回語り部による実体験等の話しについて聴講することで、防災意識の向上と、地域の団結、自主防災組織の結成の促進を図ることとしたい。
内容	震災当日 3 月 11 日（金）は昼食後、主人と二人でのんびりしていた矢先の 14 時 46 分、体に大きな揺れを感じた。家全体が左右、上下大きく揺れて部屋中の物が転げ落ち散乱した。それらを片付けはじめていると、外から男性の声が耳に入って来た。「津波が来るゾォ～」と大きな声で叫んで通り去った。私も主人も自宅の隣の方達と一緒にとりあえずそこにあったバックを持ち、玄関の鍵を掛け出ていた長靴を履き、中野小学校へ行くことにした。途中、近所に住む、体の少し不自由な夫婦がまだ避難しようとしていなかったので、皆でせかして用意をさせ、付き添いながら学校へ向かった。 学校は目の前なのに、歩いた時間はとても長く感じた。学校はすぐに避難してきた人々でごった返し、我先に 2 階へ行こうとしていた。体の不自由な奥さんの方を体格のいい男性に手伝いを頼み、いやがる本人を無理矢理おぶってもらい 2 階へ上がることができた。その人達を先生にお願いして私たちは屋上へ駆け上がった。そこには近隣の人達や小学生も集まっていた。 目の前の七北田川を見たら船が上流に上って来る。海に目をやると、何と説明したらいいのか、波が高く立ち上がっていた。何という光景か？？　まさにベルリンの壁である。身も心も恐怖で固まってしまい、その波をちゃんと見たのか、我が家がいつ流されたのかわからない。あっという間に回りは海になっていた。私も屋上にいた人達も叫び声も出ず、ただ呆然としていた。周りを眼で追ったら、屋根の上に乗った男の人が体育館脇を流されていき、七北田川を見ればテールランプがついた車が何台も海に向かって流されていった。この時始めて、私自身の「命」が助かったとだと胸の中でつぶやいた。 寒い、大粒の雪が降ってきた。2 階の教室へ戻ったら、小学生たちが泥水を下に掃きだしていた。夫も私も使えるものをみつけ、一生懸命水をかき出した。夜になり、ヘリコプターが上空に来て、低学年の子供たちや体調不良の人が優先で霞目の自衛隊に救助された。時間が過ぎて行くのが早くもあり、遅くも感じる中で一夜が明けた。 翌朝、昨日の出来事が「ウソ」のように海から太陽が上がっていた。校庭は瓦礫や車が重なり合って見るも無惨である。お昼過ぎに札幌のヘリコプターが七北田川の堤防に降り立ち、70 歳以上の人が優先に救助された。

	私たちは、救助に来た数台の市営バスまでヘドロや瓦礫の中を歩き、一次避難所の「仙台工業高校」へ向かった。中野小学校を出る時に、体育館や昇降口に亡くなった方のご遺体があることを知っていた私たちは、見ることができず、下を見ながら黙々とバスに乗り込んだ。行き先が仙台工業高校と知った子供たちの父兄は、昨夜子どもたちが運ばれた霞目の自衛隊に行ってほしいと騒ぎになり、運転手はかなり困惑していた。後で町内の人が手配し、無事子供たちと親は一緒になることができた。仙台工業高校の体育館も近くのマンションの避難者などでいっぱいだった。ストーブの周りに身を寄せて、この日から避難生活が始まった。3 日目の夜にして初めて、温かいごはんを口にした。支援物資に毛布、衣類、食品、バナナ、みかん類を食べ 1 ヶ月過ごした。今までの何不自由ない生活、日常が、一瞬にして変化した。 2 次避難は新田の宮城野体育館と告げられ、着いたら皆喜んだ。「畳」が敷いてあり、一人ひとりに組布団が渡され、その場で思わず大の字になった。ここでの集団生活が始まった。3 ヶ月の日々の中、人とのつながり、絆が生まれた。避難生活中の 4 月 27 日は、両陛下にお見舞いに来ていただき、この世に生きていて良かったと、思い、感じた日であった。 全国の方々に励ましをいただいて、私は今日に至っている。娘の嫁ぎ先である閖上では、両親や兄弟など 4 人も亡くなっており、深い傷を負った娘婿が気の毒であり、震災前の生活に戻るにはまだ時間を要するが、あの時（3 月 11 日）助けて助けられ、お互いの命の尊さを一生忘れることはできない。
開催地より	東日本大震災の被災者の体験談を纏めた文集を朗読していただき、災害の伝承を行った。当町としては本日の災害伝承語り部による朗読講演を受けて、自主防災組織の設置と実務研修会の開催を進めていきたい。